Title	ニーバー2と「エルンスト・トレルチの影」(共同研究報告 : ニーバー研究)
Author(s)	松田, 寿美子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-2 : 19-20
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2415
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

【ニーバー研究】
ニーバー^{2}と「エルンスト・トレルチの影」

2010年５月15日（土曜日）、聖学院本部新館２階集会室において、本年度第１回「ラインホルド・ニーバー研究」会は32名の参加者の下に開催された。「ニーバー研究センター」は日本におけるニーバー研究の拠点的な役割を果たすために聖学院総合研究所にあらたに設けられたものである。今回の講演者は、北海学園大学より安酸敏眞教授をお迎えして、「ニーバー^{2}と（エルンスト・トレルチの影）」についての発表が行われた。概要は以下のとおりである。

はじめに、安酸氏によると、「ニーバー^{2}」という表記は、若者の携帯メールの用語法に模ったもので、ニーバー・ニーバー、つまりラインホルド・ニーバーとヘルムート・リチャードのニーバー兄弟を意味している。次に「エルンスト・トイルチ

の影」は、ヴァン・A・ハーヴィーの“The Shadow of Ernst Troeltsch”というフレーズを拝借したのであり、エルンスト・トレルチが生涯の大部分を通じて格闘した問題は、伝統的なキリスト教信仰と神学にとって歴史的・批判的方法が有する意義であった。彼はこの方法の発展が人間の思想における偉大な前進の一つをなしていることを、実際、それが西洋人の意識における革命を前提していることを見抜いたと述べられている。

次に20世紀の神学者たちに当惑をもたらすトレルチ思想を歴史主義の問題として、「批判」(Kritik)、「類比」(Analogie)、「相関」(Korrwlation)」という三大原則の近代歴史学の方法に基づいて述べられた。

更に、ニーバー兄弟の「ダンデム」の軌跡、ニーバー兄弟とトレルチおよび「歴史主義」の問題、ラインホルドとリチャードの思想的相違点が論じられた。

講演のむすびとして、中西部出身のドイツ移民二世のリチャード･ニーバーは、アメリカを内側、外側の両方から理解をして「神の絶対的な主権性」という視点のもとに、物事の本質を直感、歴史を「眺める」(schauen) ことができた。また、トレルチは、ニーバーのような視点が決して欠けていたのではなくて、『信仰論』の言葉を引用すれば、「神はつねに創造的で生き生きと活動する方である。神の本質的な告知は、存在のうちにではなく、生成 (Werden) のうちにあり、自然のうちにではなく､歴史 (Geschichte) のうちにある。」このような神観がトレルチの「エネルギッシュな有神論」(ein energischer Theismus) を形づくっているが、この核心部分は彼の宗教哲学と歴史哲学においては隠れた背景にとどまっている。また、われわれがこの形而上学的信仰の次元に光を当てると、トレルトチからニーバー兄弟へと至る道が、ある本質的必然性をもったものであり、多くの可能性を秘めた興味津津の課題であると纏められた。

発表を受けて質疑応答が行われた

安酸氏の講演後にはコーヒータイムが設けられて、引き続き活発な質疑応答がなされ、その中ではトレルチのベルリン時代に「知的共同戦線」を張っていたフリードリヒ・マイネッケや、ゲーテに関する質問も取り上げられて、ヴァラエティーに富んだ議論が行われたことを付記したい。

(文責:松田寿美子　聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程)

(2010年５月15日、聖学院本部新館２階)